

入選

親切の一步

奈良県 耳成南小学校 五年

中嶋 小百合

私には、大好きなおばあちゃんがあります。そのおばあちゃんが、今年の夏に入院してしまいました。おばあちゃんと離れて私は、おばあちゃんのありがたみをしみじみと感じながら毎日過ごしています。おばあちゃんは、ちょっとした気遣いや優しさを、私にくれていたことをとても感じています。

おばあちゃんは、何十年もボランティア活動をやっていたそうです。人のことを自分のことのように考えることができるおばあちゃんは、すごいと思います。私は、そんなおばあちゃんを見習って、自分ができることをやってみよう、と考えるようになりました。

ある日、買い物に行ったとき、こんなことがありました。私の母は、店の入り口の近くに車を停めました。すると、少し離れている道の真ん中に、買い物カートが放置されていたのです。そのカートは、駐車場を歩くお客さんの迷惑になっていました。

母が止めた自動車の位置からは、そのまま行けばすぐに店に入ることができたのですが、母は、わざわざ遠回りをして、放置されていたカートをカート置き場に戻しました。

誰かが放置したカートにぶつかってケガをしたり、車の邪魔になったりするかもしれません。誰もほめてくれなくても、誰かが喜ぶ顔を期待するわけでもなく、正しいと思うことを進んでやる母はすてきなあ、と思いました。

母がやってみたくて、誰か気づいた人が、そのときに直すことができればいいなと思います。小さな気づきと思いやりが、親切の一步につながるんだと感じました。

私はこれまで、

「親切って、人に喜んでもらうとか、お礼やほめ言葉をももらうことを期待してやるものだ。」

と考えていました。でも、誰かのためになることが、親切というのだと、母の行動を見て気づきました。

私は、電車などで誰かに席をゆずろうとしたとき、

「どうしよう……。」

と迷ったり、人の目を気にしたりして、結局できないことがよくあります。人を思いやる気持ちを行動に移すためには、ちょっとした勇気が必要だ、と母の行動から学びました。相手のことを考えて、気づくことと、その気づきを行動に移すことが本当の親切だと思います。

そう考えると、おばあちゃんは、自分が後悔しないように毎日毎日、行動していたのだと思います。私は、家族のためにやろうとしてくれていたおばあちゃんの気持ちを、とてもありがたいものなのだと、改めて感謝しています。

お礼を言ってもらったり、ほめてもらったりしなくても、「だれかのためにやって良かった」と、自分が思うことができれば、それが小さな親切なのだ、と私は思います。

私は、おばあちゃんや母のように、気づく力や行動力のある、思いやりのある人になりたいです。